

2010年8月31日(火)

日本イラク医療支援ネットワーク

〒171-0033 東京都豊島区高田3-10-24

第二大島ビル303 ☎03-6228-0746

サマーキャンプ2010 病気を乗り越えるきっかけに

佐藤真紀(JIM-NET事務局長)

7月1~3日、小児がんの生存者と闘病中の子ども達を集めたサマーキャンプを北イラクのアルビルで開催しました。

このキャンプの目的は、がんの治療を終了した子どもたちと、現在治療中の子ども達がふれあい、同じ時間を共有することで、悩みを分かち合い「がんは治る病気」だというポジティブな印象を持ってもらい、治療中の子どもたちに病気を乗り越えるきっかけとしてもらうことです。

アラブ人の治療を終えた子ども達と現在闘病中のクルド人の子ども達、父兄を含めると20人以上がアルビルに集いました。



アヤ・ハイサムが描いた鼻血を出した自画像

みんなで絵を描く

ワークショップでは、画材の使い方や技法を教え、子ども達に、年末から始まる「チョコ募金」のためのチョコのパッケージをデザインしてもらいました。がんの子ども達が一方的に支援を受けるのではなく、自らも支援活動に参加することによって、「自信を持って生きること」が出来るようになることがワークショップの目的の一つです。

アルビルはクルド人が大半です。サダム政権下で、しばしばクルド人の反乱がおこり、1988年には、サダム政権は、制裁のために化学兵器を使用しました。

1991年の湾岸戦争後にクルド人が反乱を起こしましたがサダム政権に鎮圧されました。その後、多国籍軍の介入もあり、クルド地域はイラク中央政権からは切り離されて、国連の監視下に置かれています。言語も異なり、クルド人とアラブ人の間には、大きなギャップがあります。

JIM-NETでは、昨年11月よりアルビルでの活動を開始しましたが、バグダッドやバスラに比べて、治安が安定しており、民間の設備投資などが盛んに行われる一方で、がん治療の歴史は浅く、治療成績は悪く、がん=死を意味し、闘病中の子ども達には笑顔がありません。医者たちもあきらめがちだと思います。

JIM-NETを介して、日本人やアラブ人が関わることによって、医療現場や、地域社会が、子ども達の命を守ろうと本気になってもらわればと願います。そして、今回、クルドNGOネットワークが事務所をワークショップの会場として提供してくれることになりました。政治の世界では、民族や宗教が対立しますが、医療の現場では、アラブやクルドとかの関係なしにみんなで協力し合うことができます。将来の平和に向けて、草の根的な交流のパイプを作つておくことは大切だと考えます。

7月1日

アーティストたちが到着

早朝4:30、バスラを出発したのは、▼ザイナブ・カマル(18歳 バスラ)…2005年

に白血病を発症するが無事に治療を終えた。写実的な絵が得意で「イブライヒムの物語」という絵本を出版。現在高校入試の勉強中。院内学級で

زینب کمال مونی
عام ١٨
الدورة



週に2日ほど、がんの子ども達に絵を教えている。

「先生としては、50点くらいかな。でも、子ども達は彼女ががんを克服したことで勇気付けられる。そういう

う効果は大きい」とバスラローカルスタッフのイブラヒムは評価する。ザイナブにとっては、先生としてのリーダーシップを学ぶ場所でもある。

▼ハウラ・ジャマル(15歳 サマーワ)…彼女の絵は、08

年、09年、10年と3年連続でチョコレートの絵に採用された。「ハウラの赤い花」は絵本にもなった。最近では「瞬またたき」という映画(北川景子主演)で、ポストカードになった「赤い花」が小道具として使われている。カタログハウスのギフト用メッセージカードに彼女の絵が採用されるなど、活躍を続けている。

一方、早朝6:00、バグダッドを出発したGMC(車名)には、二人のアヤが乗っていた。

▼アヤ・ドリッド(11歳 バグダッド)…5歳のときに骨肉腫で右足を付け根から切断した。

09年は、片足の自画像を描き、チョコのパッケージに使われる。片足というハンディキャップにもめげずに頑張って生きていく姿は日本のTVでも幾度か報道された。

2007年は、ヨルダンを訪問した中田英寿からサイン入りボールをプレゼントされた。2009年4月放映の地球アゴラは、スカイプを使った生放送で、川平慈英とやりとりした。

アヤ・ハイサム(9歳 バグダッド)…2010年のチョコのパッケージでは、自転車の絵を提供、ユニークな表現力をもち、最も油がのったアーティストである。

現在ウィルムス腫瘍の治療中のために参加が危ぶまれたが、体調もよく無事に参加することが出来た。

バグダッドを出発した車は、午後1時に無事にアルビルに到着した。夕方4時、約14時間かかってバスラからの車もアルビルに無事に到着。

7月2日

「鼻血がでたよ」ワークショップスタート

前日アルビル入りした、バスラ、バグダッド等からの子ども達に加え、アルビルで治療中の患者4名が加わり合計8名の子ども達がそろいました。父母も合わせると20名ほどの参加になりました。初めて出会う子ども達もいるので、アイス・ブレーキングをかねて、

鼻血を出している自画像を描きます。自画像に鼻血が加わるととてもユーモラスな絵になります。



絵を描くハウラ(中央)とアヤ・ハイサム(右)和みます。出来上がった絵を見せてまずは自己紹介。実は、がんの治療で大切なのが、抗がん剤と、感染症予防、そして、鼻血などの出血対策です。

JIM-NETでは、輸血用の消耗品などを供与しており、こういった絵も、キャンペーンに使っていく予定です。

次のセッションは「平和のためのチョコレート」JIM-NETの取り組むチョコ募金について、ローカルスタッフのイブラヒムが、「みんなの絵が、募金活動につかわれるんだよ」と子ども達に説明。昨年のサプリーンが描いた絵がついたチョコレートの缶をみんなに見てもらい、ハート型をしたかわいいチョコを味わってもらいました。

そして、チョコを食べている絵を子ども達に描いてもらいました。

最後のセッションは、アクリル絵の具を使い、一枚の布にみんなで絵を描くというもの。ここでは、ザイナブとハウラが小さい子どもの面倒をよくみていました。

ザイナブは、「とても興味深いワークショップでした。バスラでも同じようなことをやってみようと思います。クルドの子ども達とは言葉が通じないので、あまり話すことは出来ませんでしたが、みんな、病気を乗り越えてほしい」

現地に駐在する川添看護師は、「アルビルでは、院内学級のようなものがないので、クルドの子ども達は本当に楽しそうでした。ザイナブや、ハウラが元気で活躍している姿を見て、参加した父母も安心したようです。」と話していました。

父母が悩みを相談

治療中のアヤ・ハイサムのお父さん。今回のサマーキャンプの参加にはあまり乗り気ではありませんでしたが、娘の治療方針のことで、ナナカリーの医者に相談に乗ってもらえるのならと参加を決めました。

08年9月、発熱が続くのでバグダッドの病院に行くと腫瘍があるといわれました。しかし診断がうまくいかず、抗がん剤の成果も出ません。借金をしてヨルダンのキングフセインがんセンターに行くとウィルムス腫瘍だと診断されました。ウィルムス腫瘍は、腎臓の

がんでも、予後がよければ日本では95%が助かるとも言われています。しかし、治療の途中で、お金が尽きてバグダッドに帰ってしまったのです。そこでJIM-NE Tが今年の3月に150万円を拠出して、ヨルダンでの手術と治療を行いました。体力がもたないかもしれないという医者の意見もありましたが、厳しい治療を乗り越え、今はバグダッドで、ヨルダンの病院と連絡を取りながら、治療を継続しています。

お父さん的心配は、「今の治療法では、一週間に2回以上病院に行かなければならぬ。もっと病院に行く回数を減らす治療法はないのか」ということ。

子どもを連れて行くとその間仕事が出来ない。今までの借金が返せないというのです。ナナカリーの医師からは「お父さん、そんな都合のいい治療法はないです。きちんと病院に連れていくように。でないと娘さんは助かりませんよ」と言われたそうです。

結局、お父さんに代わってJIM-NE Tのアブ・サイードが病院に連れて行ってあげることになり、お父さんは、その間も仕事が出来るようになりました。

アヤのうれしそうな顔！

今回のワークショップは、患者の家族同士で病気の

こと以外にもいろいろ情報交換が出来たようです。

7月3日

みんなで遠足に！

朝から、子ども達が、ホテルでチョコレートのデザインを考えています。その間に僕たちはアヤ・ハイサムを病院に連れて行き、昼からは、風光明媚な山の方へと遠足に行きました。バグダッドやバスラでは、治安の問題もあり、自然と戯れるような遠足はなかなかできません。

クルド人患者のムハンマド君(3歳)も医師の許可を得て同行することが出来ました。ムハンマド君は、とても楽しかったので、後日、ザイナブやハウラ、アヤたちに手紙を書いたそうです。

来年も？

このようなサマーキャンプは、日本をはじめ先進国では通常のことです。今回、地元の新聞だけでなく、NHKの現地取材も入り、8月7日の海外ネットワークで特集を組んでいただきました。来年は、日本人ボランティアも参加できるような枠組みが作れたらいいと思います。

油絵の具とチョコレート

5月にアルビルを訪れた時、川添看護師に頼んで彼女が最も懇意にしているというアーシア(7歳)の家を訪問した。

アーシアの父は、キルクークからやってきた。サダメ政権下でのアラブ化政策で、キルクークを追われたというが「きちんと補償金を払ってくれた」と恨む様子はない。魚屋を営んでいるのだが、店を持つているわけではなく、リヤカーに魚を積んで路上で売りさばく。最近はバイクを手に入れた。アルビルから車で20分くらい行くとキルクークから移住したクルド人の居住区がある。彼が待ち受けていて、バイクで車を先導してくれた。アーシアと妹が出迎えてくれる。日本人が来ると聞いておめかしをしている。

さっそく僕は、買ってきました

アーシアの兄オサマが描いたかたつむり



絵の具で絵を教える。筆を洗おうとしたら、絵の具が固まってしまう。何か変だと思ったら僕が買ってきたのは油絵の具だった。アーシアと兄のオサマは、たくさん絵を描いた。風が吹くと、紙が飛んで、絵の具が服についた。アーシアは絵の具を踏んでしまった。油絵の具はなかなか乾かないから絨毯

に油絵の具が付き大変なことになったでも、出来上がった絵の力強さは素晴らしい。

アーシアには、7月のワークショップにもぜひ参加してほしかったが、直前になって鼻血が止まらなくなり参加を断念した。帰国してから、アーシアが亡くなったとの報せが川添看護師から届いた。

2011年のチョコ募金用チョコレートのデザインをしなければならない。ワークショップの思い出をこめた作品を考えていたのだが、これはという絵がなかったので、追加のセッションを行った。ハウラやザイナブやアヤの絵はとてもかわいい。でも、何かが足りない。アーシアとオサマが油絵の具でどろどろになりながら描いてくれた絵のなかにあるもの、躍動のあるリズム。絵力。

「僕たちが目指すもの、がんは、乗り越えられる病気であることの成功例をつくること」だから、死んだ子どもの絵は使わないときめていた。

迷った挙句、アーシアとオサマの絵を使うことにした。何よりも絵力に負けた。

それでも前へ進まなきや…

アルビル、ナナカリ一病院報告

川添圭子(JIM-NET看護師)

子どもが毎日死んでいく、そんな現実に直面しています。7月に入り、多くの子どもが立て続けに亡くなりました。7月2日にレシュワンが、3日にサーワインが、4日にムハンマドが、5日にアーシアが、9日にもあまり関わなかった13歳の男の子、13日にはハラットが…。レシュワン、サーワイン、アーシアは昨年11月からのお付き合いです。レシュワンとサーワインはもうすぐ2歳になるはずでした。



レシュワン

レシュワンは白血病の男の子でした。日本の新聞にも載ったことがあります。元気だった頃はよく笑う子でした。長期に渡り病院にいたので私にもなついてくれて、抱きついてきてくれるようになっていました。彼は、最期を病院ではなく自宅で迎えました。

サーワインは白血病の女の子でした。遠いところから治療に来ていました。彼女は人見知りが激しかったのでなかなかなついてくれませんでした。しかし、次第に慣れてきて、亡くなる少し前まで、会う度に投げキッスをしてくれました。元気そうでしたが急

変し、突然亡くなってしまいました。

アーシアは7歳の白血病の女の子でした。初めて病院訪問をした前の日の夜間に緊急入院をしたのが彼女でした。本当に初めからのお付き合いという感じだったのが彼女です。アーシアは点滴も検査も大嫌いで毎回大騒ぎして皆を困らせていましたが、ふだんの彼女は明るくかわいい女の子だったので、皆に愛されていました。

そんなアーシアの容体が急激に悪くなったのは6月の終わりでした。高熱、失明。受け入れるには困難な状態が続きました。そんな中、同じ病院内で次々子どもが死んでいくのです。皆アーシアのお友達でした。亡くなる前の日、アーシアのことがあまりに気になつたので、夕方にもう一度、病院へ行きました。アーシアは眠っていました。とてもきれいな寝顔でした。お母さんが「レシュワン、サーワイン、ムハンマドも死んで、次はアーシアだ」と言いました。それを聞いてお母さんとふたりで泣きました。そして次の日の朝、アーシアは亡くなりました。心臓が止まった瞬間、お

母さんが泣き崩れました。私はこちらの看護師と蘇生を試みました。心臓マッサージをしました。でもアーシアは戻ってきませんでした。

私は亡くなっていた彼らのことが大好きでした。そんな彼らのいなくなった現実を受け入れる前に、新たに子どもが死んでいきます。何もできなかつた後悔や、最期に会えなかつた後悔、悲しみや寂しさで押しつぶされそうになります。でもまた、他にも状態の悪い子どもがいます。そんな彼らのためにもしなければいけないことがあります。

例え、薬を探すこと。状態の悪い子どものお父さんが「よく効く薬がほしい」と訴えてきます。彼がほしいのは白血球を回復させる薬です。彼の娘の白血球は、その薬を投与し続けているにも関わらず、200程度(基準値は4000~9000)から上昇しません。他にもその薬を使っていて、全く改善の見られない子どもがいます。JIM-NETで購入しようとしたが、流通しているものは病院で使っているのと同じものばかり。お医者さんたちは「日本のものがよく効いたので日本製がどうにか手に入らないか」とおっしゃいます。私もそうしたい。でも、日数がかかる。加藤君(日本チャーチノブイリ連帯基金)にお願いして、アンマンで探してもらったり、トルコの企業に問い合わせてもらったりしました。それでも難しいものは難しい。薬の必要な子どもたちに申し訳ない気持ちでいっぱいの毎日です。

その薬を必要としていたひとりの女の子の状態が日々悪くなります。それを毎日そばで見ています。意識がなくなった日に、本当に申し訳なくて、彼女のおばあちゃんと一緒に泣いてしまいました。

悲しいことばかりの連続です。たくさん子どもがいなくなってしまいました。それでも前へ進まなきや…。今すぐにこの状況は変えられないかも知れないけれど、いつか変わるかもしれない。そう信じて、子どもたちが笑って生きられる未来に光を見つけられるよう、少しづつ後悔や悲しみが減るよう、ナナカリ一病院のスタッフとともに頑張っていけたらと思います。



絵を描くアーシア(5月)

2009年度会計報告と2010年度プロジェクト

去る7月7日、JIM-NET運営会議が開かれ、2009年度の決算と2010年度の活動計画が承認されましたので、ご報告いたします。

● 2009年度決算

収入の部

会費	5,254,000
一般寄付	9,115,035
チョコ募金	51,550,808
構成団体拠出金	38,496,060
物品・書籍販売	1,046,479
絵画展収入	366,840
雑収入	630,340
受取利息収入	5,753
前年度繰越金	44,450,074
収入計	150,915,389

支出の部

海外プロジェクト	医療支援(医薬品)	32,178,245
	医療支援(その他)	29,602
	患者支援(バスラ)	2,308,412
	患者支援(ヨルダン)	3,360,476
	院内学級	170,433
	JIM-NET会議	2,172,383
	緊急対応費	40,000,000
	感染症対策看護師派遣	2,974,644
	難民支援	1,352,044
国内プロジェクト	管理費	10,500,806
	海外プロジェクト計	95,047,045
	広告宣伝費	283,512
	チョコ募金経費	13,411,818
	物販購入費	597,028
国内プロジェクト	国内ネットワーク費	30,000
	国内プロジェクト計	14,322,358
支出総計	管理費	12,054,363
	繰越金	29,491,623
	支出総計	150,915,389

単位は円

※ 09年度の募金(チョコ募金)収入は、10年度の医療支援分であり、単なる繰越金とは区別するため、一部「緊急対応費」として計上しています。

● 海外プロジェクト

2010年度も、これまで通りイラクの各病院への医薬品支援を継続して行なっていきますが、今年度は、各地域におけるそれぞれの病院の特徴を引き出す支援を行ない、各分野でのモデル病院を作ることで、イラク国内での相互の医療技術協力を促進していくことを目指します。具体的には、次の三地域で以下のようなテーマを掲げて支援していきます。

■ アルビル (ナナカリー病院)

感染症対策のトレーニングセンターに

ナナカリーの感染症対策技術を向上させ、モデル病院として、イラク国内他地域から看護師を招聘しトレーニングを行うセンターとして機能するようにします。そのために日本から医師や看護師を派遣し、技術移転を行ないます。

■ バスラ (産科小児科病院)

総合的な取り組み

医療支援だけでなく、患者への教育支援・精神的な支援・経済的支援を組み合わせた総合的な取り組みで、がん患者や家族が安心して暮らせる社会つくりに取り組みます。

貧困家庭への通院支援も引き続き行ないます。

院内学級に絵の専門教員を派遣します。

■ バグダッド (子ども福祉教育病院/中央小児教育病院)

先端技術の導入

遺伝子解析などの最先端技術を導入し、5年後に骨髄移植が可能となるように、信州大学の協力を得て、調査研究に取り組みます。

● 国内プロジェクト

国内の活動は、支援の現場を支えるための募金活動をはじめ、「イラクを発信するJIM-NET」として、「イラク戦争検証」「劣化ウラン」「難民」の三つのキーワードを軸に、メディアが取り上げなくなりつつあるイラクを、支援に携わる立場から発信することを重点的に行なっています。のためにホームページの刷新や絵画貸し出し事業の強化などを行ないます。

現場から得られた情報をもとに、国際機関や日本政府へも積極的に政策提言を行なっていきます。

これらJIM-NETの活動は、皆様の支援で成り立っています。どうぞこれからも引き続きイラクの子どもたちとJIM-NETへのご支援をお願いいたします。

難民について考える

6月20日は、国連が定めた世界難民の日。「イラク戦争と難民」一日だけの写真展とトークを開催しました。

佐藤真紀事務局長がイラク開戦時から撮りためた難民の写真を浜松で展示することになっていたのが、会場の都合で突然中止になりました。せっかくの機会が失われてしまうのは残念なので、会場を東京のカタログハウスに変更し、6月25日に一日だけの展示を急遽行うことになりました。開催の決定から当日まで10日しかなく十分な広報が出来ませんでしたが、50名ほどの参加がありました。

会場には、難民キャンプで撮影されたB2サイズの写真40点と、実際にキャンプで使われていたテントを展示、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)も協力してくれ、ちょうど一時帰国中のUNHCRバスラ事務所フィールドオフィサーの帶刀豊氏がトークに参加してくださいました。また、UNFPA(国連人口基金東京事務所)が主催する「お母さんの命を守るキャンペーン」の賛同署名を求めたところ20名が署名をしてくださいました。

佐藤事務局長は、主に、シリア、ヨルダンの国境に出てきた難民キャンプで出会ったパレスチナ人、イラン系クルド人などの苦悩の生活を紹介しました。

—以下、佐藤事務局長のトークから—

「日本政府が、イラク戦争前に、難民を支援することを表明したが、難民問題の解決はそう簡単ではない。たとえば、ディアールという少女は、がんにかかっていたが、難民ということで、キャンプに収容され、病院にもきちんと連れて行ってもらえずに、手遅れになって死んでいった。日本は、世界第二位の経済大国に相応しい難民支援をすると言ったのに何もしてあげられなかつたのが悔しい。ディアールの家族はアメリカが受け入れた。

現場にいて思うのは、第三国定住先がなかなか見つからないこと。日本は、難民を受け入れようとはしない。難民の受け入れも大きな国際貢献になることを、政府に認識してもらい他の先進国並みの受け入れ態勢を作ることが必要だ。

イラク戦争によってつくられた難民。今までの伊朗・イラク戦争や、イスラエル建国戦争で、イランやパレスチナから逃げてきた難民の問題。こういった政治問題が解決しないかぎり、本質的な問題の解決にはならない。NGOが出来ることは、隙間の人道支援しかないので、出会った人々の物語を伝えていき、難民問題を風化させないことが大切。風化させてしまうと問題解決はさらに難しくなるから。そして、何より



も難民をつくらない、戦争を起こさない社会をどうつくっていくのかが問われている。そのためにもイラク戦争を、難民という観点からもきちんと検証していくべきだろう。」

—以下、UNHCRのバスラ事務所のフィールドオフィサーを勤める帶刀氏のトークから—

「主にバスラの国内避難民を支援している。米軍キャンプ内に事務所があり、米軍と一緒に行動しなければならず、写真を撮ることも許されない。NGOのような、人に接した活動が出来ないのが残念だ。今のイラクは、二極化してしまって、貧富の差が激しくなっている。たとえば、ローカルスタッフの娘が風邪を引いただけで、暑さと水の悪さ、そしてちゃんとした薬が処方されずに死んでいったと聞いて驚いた。

UNHCRの仕事は、プロテクション(保護)が中心でシェルター(避難所)を作り、水の支援や食糧支援をやっているが、行き当たりばったりの支援ではダメで、10年、20年を見越した支援、逃げてきた人はどうしたいのか、恒久的な解決をサポートしなければいけない。

そのためには、地域コミュニティが力をつけていくことが重要だと思う。ローカルのNGOやコミュニティがマネージメントをきちんとできるようにサポートしていくことで、私たちがいなくなつた後もやっていける事が大切だ。たとえば、帰ってきた人に土地とお金をあげることを政府がやっているが、土地をもらったのはいいがお金がない、じゃあUNHCRが家を建ててあげるなど協力していくと効果がある。

オイルカンパニーが入ってきて、石油目当てのお金は入ってくるが、経済格差が広がり、セイフティネットが必要になってくる。NGOと一緒に現場に出て行って本来のUNHCRの活動に戻していきたい。イラクは優秀な人が多いので、将来に関しては楽観視している。悲観的にならず、イラクの人たちと一緒にやっていこう。」



帯刀豊氏(左)と佐藤真紀事務局長(右)

イベントを終えて

1991年、当国連難民高等弁務官だった緒方貞子氏の最初の大きな仕事が、湾岸戦争後のイラクの内戦でした。反乱を起こしたクルド人をサダメ政権は制圧。化学兵器の使用を恐れたクルド人が難民化しますが、40万人の難民は、トルコ軍に追い戻されてしましました。

UNHCRのミッションは、難民の支援ですが、国境を越えないと難民にならないの支援できない。仮に支援したとしてもUNHCRのスタッフがイラク軍に攻撃される危険がある。しかし何もしなかったら、多くの人々の命が失われる…。そこで緒方さんは、決断をします。多国籍軍からの協力を取り付け、国内避難民の支援を行なう。UNHCRが初めて国内避難民を支援の対象としたのです。軍と協働するというのも初めての試みでした。

イラク戦争では、国連安保理決議案1546で、多国籍

JIM-NET参加団体のご紹介 No.3 スマイルこどもクリニック 良心の連鎖 スマイルこどもクリニック:加藤ユカリ(医師)

スマイルこどもクリニックは、2001年に夫の隆医師と一緒に開設した、横浜、浦安で24時間365日小児急患を受け入れているクリニックです。テレビの「情熱大陸」や連続ドラマなどでもご存知の方もいらっしゃるかもしれません。スマイル医師団は、JIM-NETとともに10回以上、難民キャンプへイラク戦争で難民となつたこどもたちへの医療支援に行ってきましたが、そもそも、JIM-NETの佐藤真紀さんとの出会いはとっても不思議なものでした。

2004年6月にイラクの女医ジャナン先生が信州大学に講演に来られ、お話を聞きに行きました。あまりにもかわいそうな悪性腫瘍のこどもたちの写真。そして「病院には点滴の針もない、薬もない、こどもたちが次々死んでいっている。」というお話。私はびっくりして、クリニックから点滴の針をもって、ジャナン先生が宿泊しているホテルに乗り込みました。彼女はその何の変哲もない点滴針を見てとっても喜び、「今から私の友達のブンジローやマキたちが来るから、彼らに持っていくよにお願いするわ。」でも、点滴針を持っていくことは断られたのです。帰り道、激怒しながら、いただいた名刺の番号に電話したら、「点滴の針はイラク入国のときにひっかかるんですよ。」と佐藤真紀さんがふわっとした声で答えました。翌朝、お金をかき集めて振り込みました。すると間もなく原文次郎さんからメールで「現地で200人分の抗がん剤が買えました。」とジャナン先生と薬を仕分けしている写真と領収書が送られてきました。そして「いただいた点滴の針も確かに届けました。」

しばらく薬代の支援をしていましたが、その半年後、スマイルの非常勤医師から「松本に海外支援をしてい

軍がイラク暫定政府の要請によるものであることを認め、国際機関と協力してイラク復興にあたることを決めています。そして結果的に、国連職員は米軍に守られながら活動することになりました。

イラク戦争では、多国籍軍とは言いながら、ほとんどアメリカ軍であり、最初からブッシュの戦争とまで言われたイラク戦争だからです。

そこで援助の中立性が問題になります。

NGOの間でも、軍と人道支援の是非をめぐった議論が行われています。NGOは主義主張に合わないとやらないという選択肢がありますが、国連にとってはやらないことで人が死んでいくという選択肢はないと思います。いつも苦渋の選択をしていかなければいけない現場の苦しさが伝わってきました。ただ、JIM-NETのがんの支援に関しては、やはり主義主張をたてにやらないという選択はないのではとあらためて思いました。



るNGOの人たちの集まりがあるんだけど、興味あつたら会いにいきませんか。」そこで会ったのが佐藤真紀さんでした。半年ぶりの因縁の出会いでした。JIM-NETの活動の話の中にルウェイシッドの難民キャンプがありました。「医師はいるの?」と聞くと、「いるけどあんまり機能していないみたい。」「じゃあ、連れてって。」「いいよ。国連に連絡してみるよ。」

鎌田實先生やJIM-NETのみなさんとイラク国境難民キャンプやヨルダンの都市難民のところへ診療に行くようになりました。イラク国境のトリビルのノーマンズラン(緩衝地帯)にある難民キャンプは、国連も管理できず、医師もおらず、世界から見捨てられているような人たちが暮らしていました。何度も診療に訪れ、何度も国連にレポートを書いたり、直接お願ひしたりするうちに、ヨルダン国内で手術をしてもらったり、病気の子を第三国に受け入れるように交渉してくれたり、医師を派遣してくれるようになりました。彼らは今、北イラクの国連の管理する難民キャンプに移され、そこでは医師も常駐しているとのこと。でも、「君たちを見捨てていないよ。」と伝えたく、今度中古の救急車を寄付する予定です。

イラクの一人一人のこどもたち…。その物語を、ぜひ、スマイルのHP(<http://smile.av.fm/>)のレポートで知ってください。イラクのこどもたちの無邪気さ、優しさ、希望、イラクの人たちの涙ができるほどの善良さを知ってください。みなさまの「良心の連鎖」はこの悲しみを解かしつつあると思います。みなさまの温かい心は、この悲しみを終わらせることができるのです。これからもJIM-NETを応援してください。

みなさまの上に平安がありますように。

アファーク、新製品のお知らせ

西村陽子(アラブのこどもとかよくする会)



アル・クルナでの作業風景

がんなどの難病の治療のために、ヨルダンへ来ているイラク人患者家族の生活支援を目的に、クラフトの製作・日本での販売を行うアファーク・プロジェクトを始めて5年目となりました。プロジェクトにかかわったイラク人の家族は5年で20を超えましたが、その多くが、治療が終わって帰国、または欧米に移住するなどし、現在、ヨルダンには2家族が残るのみとなりました。

今年の春に白血病の治療が終わってイラク南部の町アル・クルナに戻ったムハンマド・スダーニ君の家族が、地元の病気や障害の子どものいる4家族とともにイラク国内での活動を展開していて、子どもの絵を刺繡したコースター、チグリス川流域の生活風景やモスクを刺繡したウォールポケット、ラクダのマスコットなどは、JIM-NET関連イベントで販売しています。また、現在、2011年版カレンダー(地平線を背に親子のラクダが並んだ卓上型)を製作中です。子どもたちが絵や日付を書き、お母さんたちが裁縫をします。がんで両目を失明し、ヨルダンの盲学校で勉強を続けているアリくん家族の手作り絵本“星いろのクレヨン2”も完成間近です。(アファークはアラビア語で地平線・水平線の意味です。)

JIM-NET便り読者限定アファークグッズセット(右写真 販売価格1000円+配送手数料200円)を販売します。

購入ご希望の方は、JIM-NET事務局(☎03-6228-0746)までご連絡ください。

セット内容

- ・らくだのマスコット
- ・ミニカード(2枚)
- ・子どもの刺繡入りコースター
- ・アリ君のカード
- ・メソポタミア象形文字刺繡入りしおり



戦争・平和・人権 長期的視座から問題の本質を見抜く眼 原書房 4700円(送料340円)

多様な視点から戦争を論考するため、各界の論者がそれぞれの立場から戦争に関わる文章を寄せた1冊。佐藤真紀JIM-NET事務局長も「医療支援から訴える劣化ウラン弾の廃絶—戦争の現実—」という表題で寄稿しています。購入ご希望の方は事務局(☎03-6228-0746)までご連絡ください。



局長くん

たかはし まりも
高橋マリモ



記録的猛暑が続いています。先月来日されたバスマラのドクターたちも、この暑さにだいぶ参つていました。実は、バスマラは、夏になると摂氏五十度を超える、世界でも有数の酷暑の暑さの中、今号をお届けします。

JIM-NET便り 2010年夏号
発行：日本イラク医療支援ネットワーク
発行日：2010年8月31日
〒171-0033
東京都豊島区高田3-10-24 第二大島ビル303
info-jim@jim-net.net ☎ 03-6228-0746

編集後記